

晴天。一般公開後、二度目の土曜日を迎え、湾岸道出口は朝方から車の列が続き、各ゲートは開場時間前には人の波、昼頃には早くも会場は混雑状態だった。場内ではお目当てのクルマ、気に入った参考出品モデルの発売時期や予想価格、バリエーションなど、説明員に問いかける来場者の姿があちらこちらのコーナーで見られ、説明員は汗だくの対応に追われていた。

“いま”から未来まで 主張するコンパクト DAIHATSU

軽自動車から小型まで、スモールカーに特化する企業戦略をより鮮明に打ち出している。ブース内配置も工夫され、中央通路側からフロント、センター、メインステージと奥に進むに従って“いま”から近未来、未来へとテーマ分けされ、主張のある“ We do COMPACT ”の世界を演出している。

参考出品車は市販直前のモデルから未来コンセプトカーまでの10台と他を圧して多く、ブースを華やかに彩っている。この中で最も注目されているのが軽の新モデル「NAKED」。前回ショーで人気を博したコンセプトカーだが、丸2年を経て今回ショー終了翌日の4日に発表される。ユーザーが好みに応じて内外装をアレンジできる遊び心を持った仕様に特徴があり、様々なライフシーンを想定して3台展示する力の入れようだ。来場者からは、矢継ぎ早に予想価格、オプションのバリエーションなどが問いかけていた。



ブースで最も人気の高い軽の新モデル「ネイキッド」

近未来のステージでは、セミキャブスタイルの1.3リッターワゴン「AT-7」(7人乗り)の居住空間が注目の的だ。また3リットルの燃料で100キロ走る3リッターカーのひとつの提案が「Storia 2CD」。コモンレール式噴射装置を採用した新開発の2サイクル直噴ディーゼルは、高い燃費性能と欧州の最新規制にも対応するグローバル性を備えている。

一方、未来コンセプトはスタイリッシュな軽ワゴン「EZ-U」や、2シーターの軽スポーツ「KOPEN」など4台。走る楽しさを軽自動車の枠で追求した「KOPEN」は、むしろ近未来ジャンルとも言え、反響が高いことから商品化の可能性も出てこよう。ムーヴをベースとした軽自動車では世界初のハイブリッド駆動システムを搭載した「MOVE EV-HII」は4人乗りで世界トップレベルの低燃費、リッター当たり37キロを実現し注目されている。



走る楽しさを軽で追求した「コペン」

また軽ではこれまた初の参考出品となる燃料電池自動車も目を引く。メタノールを水素に転換する改質器と燃料電池本体は自社開発であり、この分野での先進度もアピールしている。



リッター37キロ走る軽初のハイブリッド車「MOVE EV-HII」



外国人記者の目(第5回)わかる人にとってはすごいショーだ

ジェラルド・D・コナーバー(アメリカ)
Gerald・D・Conover
エンジニアリングワールド編集長(米国ミシガン州)
engineering world Editor-in-Chief

ミシガン州を中心に6万5000部を発行する専門誌だ。東京モーターショーは6回目かな。今回は一段と光や音楽に彩られエキサイティングで過熱さを感じるよ。購買層が若くなっていて、若者は大きなサウンドやショーが好きだからしょうがないだろう。

メーカーは電気自動車、燃料電池それにハイブリッドカーに視点を置いて車作りを行っており、環境に重点を置いているのがよく分かる。表面は華やかだが、よく分かる人にはすごいものが出ているのが十分理解できる。それに欧州の友人も言っていたが、英語での情報提供が毎年改善されて良くなっているよ。



ドアの素材に驚き、ドアの数に驚く サターン

ブースでは、ポリマー樹脂製のドアパネルに来場者は驚く。足で踏みつけても叩いても、パネルは一旦へこむがすぐに元に戻る。塗装もはがれない。これを見てサターンが維持費のかからない車であることを納得する。もうひとつが、左側に後席用の第三のドアを持つ3ドアクーペ「SC2」。「後席へのアクセスさえ良ければクーペが欲しい」という希望は年齢を問わず共通のようで、販売店に4ドアセダンを買いきて、3ドアクーペを購入する人が多いという。



第三のドアを持つ3ドアクーペ、「SC2」

展示内容と雰囲気由来場者を魅了する 現代自動車

コリアン・カーの盟主として、韓国で最大の売上を誇る現代自動車は、今回も多く新型車を展示した。どの車も平均した人気があるが、外装/内装ともに大改造を行って一段と個性的になった「クーペ」と、東京モーターショーで世界デビューするミニバン「トラジェ」は、そのスタイルに注目が集まっていた。意欲にあふれた展示内容とともに、にこやかに迎える説明員の家庭的な雰囲気が来場者に受けて、いつも人が絶えないブースである。



立体的な造形が目目を引く「トラジェ」

根強いファンが絶賛する高性能 BMW アルピナ

メルセデスのスペシャル版 AMGと同様、BMWのスペシャル版がアルピナだ。BMW全ラインアップのアルピナ仕様が存在する中で、今回のショーには「B10 V8」が展示されている。もちろんベース車両より性能は向上しているが、バリバリのスポーツマシン M シリーズと違って豪華さも兼ね備えているところが、アルピナの魅力。「似ているけど中身は全然違う」「運転が楽しい」など根強いファンが大勢集まっていた。



「BMW 540i」をベースにチューンした「B10 V8」

米欧の長所を併せ持つデザインが評判 大宇自動車

大宇のブースには、スタイリッシュな車が多い。韓国の軽自動車規格に適合した5ドアの「マティス」は、日本でも違和感なく受け入れられそうなキュートさだ。しかし来場者の目は、世界的にライバルの多いミニバンスタイルの「タクマ」に集中していた。パワーユニットこそ1.8リットル4気筒だが、エクステリアは個性的。欧州車の合理性と米国車の大胆さを併せ持ったデザインは、来場者にも十分なインパクトを与えたようだ。



滑らかなボディラインが「タクマ」の特徴

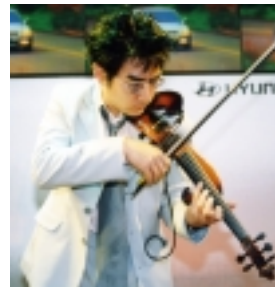
Topics (第9回) オープニングはサクソ

CYFACT、XVLなどのコンセプトカーが並ぶ日産ブースのメインステージ。男女2人の司会でショーが進む。そのショーの始まりを告げるのがサクソ。かなりの迫力だ。その日によって奏者が変わる。この日は岩木毅さん。

車をつくる人と乗る人をステージを通して結ぶための“ライブ”とか。岩木さんは知る人ぞ知るサクソ奏者。20分強のショーで出番は初めと終わりのわずかな時間。でも本物のサクソの演奏が楽しめる。



オリジナル曲を1日5回



東ホールでバイオリンの音。その音を追って着いたところが現代自動車のブース。弾き手は韓国のバイオリニスト・ユージン・パク(Eugene Park)さん。周囲は黒山の人だかり。3歳からバイオリンを弾き始め、ニューヨークのジュリアード音楽院(Juilliard School of Music)を卒業。クラシックからジャズまで何でもこなす。韓国では演奏活動をするかわたらテレビなどに出演、幅広く活動しているとのこと。

平日は5回、展示車をバックにしたステージに立ち、アレンジしたものと自作の曲を弾く。今回の来日を機会に日本でのデビューを果たしたいと意欲満々である。

30日の入場者数

145,800人

入場者数累計 856,700人

本日ご来場いただきましたVIP

ユーゴスラビア連邦共和国大使

ラドスラブ・ブライエッチ様